＜株式会社エフエム東京　第 492 回放送番組審議会＞

１．開催年月日：令和 4 年 10 月 4 日（火）

２．開催場所：エフエム東京 11 階大会議室／リモート併用開催

３．委員の出席：委員総数 6 名（社外 6 名　社内 0 名）

◇出席委員（6 名）

ロバート キャンベル　委員長　　秋　元　康　委員
川 上 未 映 子　委員　　佐 々 木 俊 尚　委員
松　田　紀　子　委員　　山　口　真　由　委員

◇欠席委員（0 名）

◇社側出席者（6 名）

唐　島　代表取締役会長
内　藤　執行役員編成制作局長
延　江　編成制作局ゼネラルプロデューサー
宮　野　編成制作局次長 兼 編成部長
若　杉　編成制作局制作部長
大　橋　制作部プロデューサー

◇社側欠席者（2 名）

黒　坂　代表取締役社長
小　川　取締役

【事務担当　内藤放送番組審議会事務局長】

４．議題：番組試聴　（約 38 分）

『SCHOOL OF LOCK!』

2022 年 8 月 22 日　（月）22：00～23：55　放送のダイジェスト

≪議事内容≫
議題 1:最近の活動について

■2022 年 8 月度　聴取率調査結果

9 月 29 日に発表された、8 月度の首都圏ラジオ合同聴取率調査結果を報告します（調査期間：2022 年 8 月 29 日～9 月 4 日）。
今回も前回 6 月度に続き、TOKYO FM がコアターゲット及び個人全体区分において在京首位を獲得しました。個人全体区分においては、4 月、6 月に続き 3 期連続の首位獲得となります。

・　男女 18～49 才（コアターゲット、4 期連続首位）
・　男女 12～59 才（4 期連続首位）
・　男女 12～69 才（3 期連続首位）
※今回は、18～49 才はニッポン放送、TBS ラジオ、J-WAVE と同率での首位、
12～69 才はニッポン放送、J-WAVE との同率での首位、
12～59 才は J-WAVE と同率での首位。

TFM の個人全体区分【男女 12～69 才】の首位獲得は、同率も含めれば調査開始以来 6 度目で、3 期連続首位は初となりました。

【委員の意見および社側説明】
（「○」委員意見／「■」社側意見）

○同率首位というのは、あまり差がないということか。

■今回は 3 局が同率という形だが、割と今、この 3 局が熾烈な争いをしているという形ではある。この 2 年ほど前までは、TBS ラジオが単独首位を割と長く飾っていたところを TBS ラジオが数字を下げ、今は在京 5 局の中では当社と J-WAVE とニッポン放送が、特に個人全体というところの区分で争って、今回は同率 3 局に並んだという形。

○ラジオのセットインユース。聴く人は増えているのか？ 減っているのか？

■前回よりは、今回微増しておりました。

議題２：番組試聴
【番組名】
『SCHOOL OF LOCK!』
2022 年 8 月 22 日 （日）22：00～23：55 放送のダイジェスト

【番組概要】
本日ご試聴いただくのは、8 月 22 日（月）に放送した『SCHOOL OF LOCK!』のダイジェストです。
毎年、夏休み明ける始業式=9 月 1 日は、子どもの自殺者が最多となり、このことは「9 月 1 日問題」と呼ばれています。これまでも『SCHOOL OF LOCK!』では、夏休みの終わりに 10 代の生徒たちの学校に行きたくない気持ちに耳を傾ける放送を幾度となく実施してきました。
8 月 22 日の放送回では、「しんど一相談室～学校に行くのがしんどい～」と題し、新学期に学校に行きたくない気持ちを抱える生徒たちと電話を繋ぎ、話を聞きました。（※8 月末日に実施をしていた時期もありますが、現在、始業式が 1 週間早くなっている地域が多いことから 8 月 22 日の放送としました。）
この放送回は、こうした問題を抱えているという事実を子どもたちのストレートな声で伝えるために、また、この番組では毎晩 10 代に居場所を開いているということを発信するために、朝日新聞とも協力し、当日の番組を密着取材という形で、記事にして頂きました。
10 代の問題は繊細で、またケースバイケースということもあり、パーソナリティの 2 人は頑張ったほうがいい人もいる、頑張らなくていいと言ってあげたほうがいい人もいる、ということをそれぞれ自身の経験とも照らしながら、10 代の声に耳を傾けました。

【委員の意見および社側説明】
（「○」委員意見／「■」社側意見）

○全体の印象として感じたのは、校長と教頭のバランスがとても良い。10 代の相談者と電話を繋いだ時の話し方・テンポに安心感があり、耳から受け取る印象は根底にあるのだと感じた。

○すごく難しい内容だと思いながら聴いた。いじめの問題、学校へ行きたくない、若い人の居場所のなさ…いろいろな悩みがあるけれど、それに対してラジオという公共の場で、距離のある人たちが一体何を言えるのかということを考えさせられた。パーソナリティの 2 人はとてもよくやっていた、と感じた。最適解を伝えている。言えることがあるならそれは現状肯定。「あなたは悪くない、話を聞いてあげる、頑張って来たね、すごいね」と。けれど、じゃあ何ができるんですか？と言われた時に、これは難しい問題。番組の方針かどうかは分からないが「誰が悪い」とは絶対に言わない。いじめる人が悪いと、これは「加害だ」と、はっきりと言わないような構成になっている。我慢したり、褒めたり、耐えたりすることでやり過ごせることではないのに、そういうことが言えないもどかしさを感じた。
居場所を作ろうというコンセプトは満たしているが、トイレの個室の延長のようにもうひとつ個室をつくるということで、ラジオはそれが限界なのかなと。もっとできるはずだということを伝えたいのではなく、本当に難しい問題だと感じた。できることと言ったら、番組の最後でも言っていた「もっといつでもバカな話しようよ」とか、声優さんが好きな声優さんの話をする、するとその子が明るくなる、という。確かにその場限りのことだけれど、その場では彼女が気が楽になって、そのことは心に残せると。ラジオはそれを最大の希望としていくべきなのか。それとももっと何かに繋げていくのか。「SCHOOL OF LOCK!」という番組ではこれが最善なのか、いろいろ考えさせられるテーマだった。

○ぺえ教頭が「あなたが今、努力できることは自分を愛することだけ」と言った。これはすごく正しい。しかし同時にすごく難しいなと感じた。このような抽象的な言葉でしか希望やポジティブさを表現できない事実。ではどうしたらいいのか、そんな風に考えながら聴いた。

○校長・教頭の話し方やテンポ、包み込むような相槌、受け答えが優しくて聴いていて涙が出てきた。ダイジェストで 2 人の相談を聞いたが、この 2 人に関しては本当に救われたのではないかな、と思った。私にもリスナーたちと同世代の子どもがいるが、同じ世代の子をもつ親として、同じようなことがあったら、子どもたちに言ってあげることができるのか、と思いながら聴いた。

○人間の成長というのは、親子間の縦軸、友達間の横軸、加えて親戚や友達の親、

地域の関わりなどの斜めの軸がすごく必要だと言われている。「SCHOOL OF LOCK!」のこの企画は斜めの軸としての存在意義があるのではないかと思う。放送日を、8 月 31 日ではなく、早く始まる地域に合わせて 8 月 22 日に放送したというのも良かった。実際に 8 月 22 日の週に学校が始まるのは全国の半分くらいで、9 月 1 日から始まる地域もある。この後で始業式を迎えた子たちも、こうやって同じ悩みを抱えた子がいてそれを聞いて分かってくれる大人がいて、居場所があるんだよということは、子どもたちがなんとか踏ん張っていけることにつながるのではないか。

○いじめに関して、「大丈夫、大丈夫」と励まして終わりでいいかと言えば違って、例えば、ラジオ以外のところに受け皿を用意したら、子どもたちにとってとても頼りがいのある場所になると思う。

○校長・教頭の距離感がいいなと感じながら聴いた。腫れ物に触るようでもなく、過剰に近すぎるわけでもなく。いじめられている子というのは、学校では全面的にいじめられている子に染まっている。笑っていようが、声優の話をしていても、バカにされているような、ダサいって見られてしまうような。学校という場所でその価値観に染まってしまう。そんな中で、校長が「何をしているときが楽しい？」と、楽しいことも、楽しめているときもあるはずだという、本来その子が輝くべきはずの、キラキラして話すはずの側面を引き出すことができていて、それ自体はある種のセラピーになっていると思う。

○2 人目の子については、法律的観点からいうと、親権者を変更した方がいいと感じる。

○出てきた 2 人が（番組構成面で）大変素晴らしい人物だと感じた。よくこういう子をピックアップできるなと。当たり前だが結論はない。ラジオ番組として踏み込むのか、何かアクションは起こさないといけないと思う。例えば、いじめている子に本当に電話して「なんでいじめるの？」と尋ねる。電話に出ないなら留守番電話には残す、など、そのくらいの踏み込みが必要かと思う。そういうことをやらないと何も変わらない。もしくは、いじめられている子を番組として全部リストアップして、出席をとるのもいいかもしれない。もしくは、番組以外の部分でスタッフが手分けして週に 1 回でもいいからある種の生存確認のようにメールで「変わりないか？」と送るとか。毎回やっていけば、「SCHOOL OF LOCK!」には居場所があるなと、繋がっているなという感覚を持ってホッとしたり、安心感につながると思う。

○何故いじめが起きるのか、よく議論もされているが、一番大きいのは、閉鎖空間にいると必ずいじめはおきると言われている。小中高というのは学級・クラスがし

っかりあって、クローズな閉鎖空間が成立していじめが起きやすい。大学になると、語学くらいしかクラスがないのであまりいじめが起きない。何度かいじめについて仕事で話を伺ったことがあり、当事者が口を揃えて言うのは、閉鎖空間に風穴があいた時に救われた感じがすると。ある田舎で、いじめにあい、どこにも出口がないと思っていた人が、ネットが普及して閲覧するようになったら、隣町に NPO があることを知り、電車に 1 時間乗って訪ねて話を聞いてもらった。それまでは狭いクラスの中だけでいじめられてそれが世界の全てだと思っていたが、そうじゃなかった、外には世界があって自分の味方がいたということを知って、急に気持ちが楽になったと。いじめられている状況は何も変わっていないが、マインドがふと軽くなったと。先ほど委員から意見のあった、一歩踏み込んでドキュメンタリー的に行くのか、それとも繋がりをもっとたくさん作って居場所を確保するのか、それはラジオとしては重要な課題かと思う。個人的に思うのは、番組に出演した 10 代は 2 人、その 2 人が、それぞれ個別で 2 人のパーソナリティに向き合う 1 対 1 の関係ができていた。これはラジオ特有の良さ。相談者がいた空間に風穴を開けて外に繋がる有効な手段になっていると思う。テレビでこの感じを作ることはできない。ではネットだとどうかというと、SNS は無数の心無いオーディエンスが介入してくる危険があり、LINE では結局閉鎖空間が変わらず、共感は広がらない。これはラジオの大きな力のひとつだと思う。また、奇跡は起こさなくても、寄り添っているだけで与えられる安心感、方向性もあると思う。

○10 代の少し上の世代、大学生などに出演してもらって経験や体験談を語ってもらうのはどうか。

■貴重なご意見を頂いた。「SCHOOL OF LOCK!」は昨日、丁度 18 年目を迎えたが、長くやっている番組なので、過去にこういうトピックの時に出てくれた人のその後を追う企画を最近、前校長の遠山君の番組で扱った。その後の経緯を追うことは、そこまで頻繁ではないが、やっていたりはするので、工夫をしたい。

■寄り添うことを最大のポイントとして放送に臨んだが、それ以外のことが何かできないのかというのは、確かに先の取り組みとして考えるべきことなのかなと今、ご意見を聞いていて思った。まだまだやるべきことは、この番組としてはあるなと思っている。

■去年、ヤングケアラーを取り上げたときも、新聞と、厚生労働省の担当の方にも注目していただいた。今回のこういういじめの問題というのは、新聞以外の別の場所も引き続き探していきたい。また、いじめで悩んでいる子どもとの定期的なつながり方、ケアの仕方みたいなものも引き続き考えていきたい。

6.議事内容を以下の方法で公表した。
①　放送:番組「ドライバーズインフォ」
10 月 29 日（土）5:55～6:00 放送
②　書面:TOKYO FM サービスセンターに据え置き
③　インターネット:TOKYO FM ホームページ内 https://www.tfm.co.jp/